

## ベカッティーニ説に見る「第三のイタリア」 の特性把握

児 山 俊 行

### 1. は じ め に

現在の日本経済は、長引く不況に苦戦を強いられている。従来、成長の牽引車としてめざましい成果を収めてきた巨大企業は、今や円高等による輸出不振や内需拡大の低迷により、かつては有効と考えられていた諸戦略を見直さざるを得なくなった。さらに、その傘下に下請として属する中小企業群は、より厳しい苦境に追い込まれている。彼らは、受注の大幅な減少やさらなる「合理化」の要求、若手労働者と後継者の不足に加え、将来の成長への不安によって、その存立が危ぶまれている。

このような中でも好調なのは、「独自性」を持つ中小企業や中堅企業である、と言われる。彼らの特徴は、企業家精神にあふれているのはもちろんのことだが、独特の「ネットワーク」を利用して独自の製品やサービスを提供し、不況の中でも成長を続けることができる、との報告も聞かれる。<sup>(1)</sup>この「ネットワーク」をめぐるのは、次代の企業体制であるか否か、また将来の産業発展の担い手となりうるかどうかなどと様々な議論が存在するが、今のところ、その定義からして定着したものはない状況である。<sup>(2)</sup>

この「ネットワーク」のモデルとされるものは、(モデルとしての賛否

(1) 例えば、ニュービジネス協議会編(1993)を参照。

(2) 「ネットワーク」論の理論的整理と独自の展望に関しては、例えば Sydow, J., (1992) を参照。

両論を含め)いくつか提示されている。そのモデル化された主たるものとして、「第三のイタリア」(Third Italy)が挙げられよう。そこには、「ネットワーク」を活用した生産によって競争力ある製品を世界市場に供給する、中小企業群を抱える「産業地区」(industrial districts)が多く存在している。そして、このような中小企業の「活躍」が、従来の経済発展の見解にも疑問を投じているようである。<sup>(3)</sup>

この「第三のイタリア」に関して様々な角度から活発な議論が起こっているが、それを惹起させた大きな要因は、おそらく MIT のセーブル／ピオーリ (C. F. Sable/M. J. Piore) の『第二の産業分水嶺』にあらう。<sup>(4)</sup>その第一の理由は、彼らによれば「第三のイタリア」は、従来の「大量生産体制」のオルタナティブ・モデルたる「弾力的専門化」(flexible specialization)に当たり、<sup>(5)</sup>それはやがて生産体制・産業体制の主流になる、との大

(3) これは以下の経緯による。イタリアでは1950～60年代にかけて機械・化学工業が躍進し、やがて他の西洋諸国のごとき経済構造になると思われていた。ところが、60年代後半から80年代初めに、大企業が国際競争力を低下させるが、逆に「第三のイタリア」で「産業地区」を構成する中小企業の多くが、国内外の市場シェアを拡大し、利益を増大させた。そこで、従来の中小企業の評価(例えば、低賃金・劣悪な労働条件のインキュベータ)とは異なる、新たな解釈がなされるようになってきたのである。

ただ周知のごとく、「第三のイタリア」と呼ばれる理由は、「産業地区」が大規模工業の盛んな北部や農業主体の南部でもない、イタリア北東・中央部地域(エミリア＝ロマーニャ・トスカーナ・マルケ・アブルツツィ・ベネトー等の各州)に集中しているからである。これら「産業地区」の分布に関しては、Sforzi, F., (1989): pp. 170-173. を参照。

(4) Sable, C. F./ Piore, M. J., (1984); セーブルらはこれ以前にも「産業地区」を研究して、1981年には、イタリアにおける革新能力を持つ独立型の小企業の興隆とその存立条件について述べている(Sable, C. F./Brusco, S., 1981.). 1982年には、「第三のイタリア」の小企業群を「ハイテク家内工業」(high-tech cottage industry)と呼び、従来の「フォードイズム」(Fordism)の原則を超える生産システムが存在することを主張する(Sable, C. F., 1982: pp. 194-231.). さらに1983年、これらイタリアでの実践を、いかにアメリカの産業政策に反映させるかを探っている(Sable, C. F./Piore, M. J., 1983.).

(5) “flexible specialization”の訳語には、他に「伸縮的専門化」「柔軟な専門化」等が使われることがあるが、ここでは「弾力的専門化」で統一したい。

胆な仮説を示したからに他ならない。<sup>(6)</sup>このように従来の経済発展モデルに修正を迫り、中小企業の「ネットワーク」を次代のモデルと見る主張には、その妥当性は別としても、従来「前近代性」等で特徴づけられがちだった中小企業に対して、将来の発展方向を示唆する何らかの論理が内在しているのではないかと考えられる。<sup>(7)</sup>このことからすれば、これら「第三のイタリア」をめぐる議論への関与は、「ネットワーク」の構造・機能とその企業経営への有効性、そしてその形成条件を少しでも明らかにし、将来の産業発展、なканずく日本中小企業の新たな発展方向を示すための道の一つになるのではなからうか。<sup>(8)</sup>

そのためには、この「第三のイタリア」を形成する「産業地区」特性の把握を試みた説と、セーブル／ピオーリの主張を比較・検討することも重要であろう。そこで、さしあたり本稿では、「産業地区」の特性把握に関する代表的な議論の一つと思われる、ベカッティーニ (G., Becattini) の最近の説を取り上げて検討し、セーブル／ピオーリ説との若干の比較を試みるつもりである。<sup>(9)</sup>但し「産業地区」の産業発展（産業体制・経済体制）上の意義についての彼らの論議まで、ここでは立ち入らない。本稿では少な

(6) セーブル／ピオーリの「弾力的専門化」の基本的構想に関しては、拙稿（1991）を参照。

(7) T・マンツは、「近代化」の観点から、最近提示されている中小企業の発展を積極的に評価する説を概観している (Manz, T., 1991.)。

(8) 「第三のイタリア」に関する著作は多数存在するが、最近の主なものとしては、例えば、Goodman, E./Bamford, J. (eds.), (1989); Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), (1990) が挙げられよう。またわが国でも近年、「第三のイタリア」での「産業地区」の特性から中小企業発展の示唆を汲み取ろうとする議論が増えている。例えば、イタリア地域経済研究会編（1989）；石倉三郎（1992）；Kiyonari, T., (1992); 岡本義行（1994）；岩橋良之（1994）などが見受けられる。

(9) ここでは Becattini, G., (1990a); Becattini, G., (1990b); Becattini, G., (1991) を取り上げる。

(10) セーブル／ピオーリでは、「産業地区」を「産業コミュニティ」（邦訳では「工業コミュニティ」）と呼んでいるが (Sable, C. F./Piore, M. J., 1984: p. 17; 邦訳, 22-23頁), ここではベカッティーニと認識対象が同一であると見なす。

くとも、「産業地区」特性をより厳密に把握するための課題を明確にすることができのではなからうか。以下、「産業地区」それ自体の特性に焦点を絞って、論じてゆくことになる。

## II. ベカッティニによる「産業地区」の特性把握

(1) まずベカッティニは、「産業地区」を経済固有の概念や地理上の「産業地帯」といった把握ではなく、社会経済的なカテゴリーとして見ようとする。なぜなら「産業地区」は、確かに工業を主要な活動としているが、次のような特徴も持つと考えられているからではないか。第一に「産業地区」では、生産活動と「共同体」生活とが融合していることである。第二に、存続には「共同体」成員間での価値体系の共有と再生産が前提条件となること、第三には経済活動における制度やルールが、その「共同体」の価値体系と整合性を持っていること、さらに第四として、「産業地区」への外部からの移民が「共同体」の「保守性」の打破に不可欠なことである。要するに「産業地区」が社会経済的なカテゴリーとされるのは、「共同体」と企業が、かつ日常生活と労働プロセスが、結合した活動体と考えられているからであらう。<sup>(11)</sup>

(2) また「産業地区」の生産プロセスの特徴としては、それが時間的空間的に分割可能なものであることが示されている。企業はいずれも小規模で、わずかな範囲の工程に専門化しており、<sup>(12)</sup> そのため連続的生産プロセスには不向きである。だが、これらの企業間では中間製品のネットワークが形成され、標準的安定的需要よりもむしろ、変動する多様化・差別化した需要への適応に長じるとされる。<sup>(13)</sup>

(11) Becattini, G., (1990a), pp. 38-40; Becattini, G., (1991): S. 34-37.

(12) この「産業地区」内企業の生産単位の特徴が、他地域の中小製造企業と異なる点であるとする (Becattini, G., 1990b: p. 164.)。

(13) また彼は、A. マーシャルの洞察を引用して、各企業が同一産業に属しつつも、そこには「主要産業」と「補助産業」の区別が存在することを指摘している (Becattini, G., 1990a: p. 40; Becattini, G., 1991: S. 37; Cf., Marshall, A., 1890: p. 332: 邦訳, 255頁)。また、岡本義行 (1994), 139-147頁, を参照。

また、それら分散化した生産プロセスへの労働配分は、「市場」や一企業の権限によってではなく「地区」でなされるという。その際、どの企業も技術次元での最適範囲は狭いので、(例えば過剰雇用による)最適の技術的規模からの逸脱を抑制し、競争力を落とさないようにしている。また大企業化や垂直的統合化は、生産システムと社会文化的風土とを分離させる傾向があるので、それを排除しようとする。

さて、「地区」で恒常的に労働が再配分されるのは、「産業地区」の労働者が各人で自分に最適な仕事を求め、より有利な職場に移動する自由裁量を持つことに由来すると見ている。<sup>(14)</sup>労働者の資質はその地区に特化しているので、地区外へ出ると自己の専門能力は無効になってしまう。同一の「産業風土」の存在する地区内であれば、<sup>(15)</sup>企業を移っても個人能力の評価は容易になされ、密接な個人的関係を通じてその企業独自の技能を修得できる。これら一連の「産業地区」での労働市場の性格は、労働者が地区内に留まる要因になるという。<sup>(16)</sup>さらに地方政府が、小規模経営を優遇するなどの政策をとって、地区からの住民の流出を抑制していることも指摘されている。<sup>(17)</sup>

(3) 「産業地区」は原料購入に際し、外国市場での大規模な買手となり、最終製品販売でも外国市場と継続的な結びつきを持つ。その中で、各「産業地区」での独自の代表的な製品が買手側に「イメージ」されてくる。そのため、この製品市場の拡大が地区の発展には必要だと考えられている。<sup>(18)</sup>

(14) 「産業地区」では、自己に最適の職務を見つけることができないことが「恥」とされるので(逆に見つけることは「名誉」になるのであろう)、各人の最適職務獲得へのインセンティブは高くなる。一方で、常に変動する需要への対応を迫られているので、継続的に最適職務も変動し、それを得る可能性が低くなる場合もある、とも述べている(Becattini, G., 1990a: p. 41f.)。

(15) A. マーシャルの「産業風土」に関する分析は、例えば、Bellandi, M., (1989): pp. 142-144. を参照。

(16) これら「産業地区」の生産プロセスや労働配分の特性把握については、Becattini, G., (1990a): pp. 40-42; Becattini, G., (1991): S. 37-39. を参照。

(17) Becattini, G., (1991): S. 46.

(18) Becattini, G., (1990a): p. 44; Becattini, G., (1991): S. 39.

このように、一方で外国市場と、他方では地区内の分散化した生産とを有機的に「産業地区」で結び合わせる役割を持つと考えられているのが、「真正企業家」(pure entrepreneurs/der echte, reine Unternehmer)として示される。<sup>(19)</sup>

彼はまず、工場や労働者を保持しない。だが、外部の市場傾向を入念に評価しつつ、同時に地区の生産活動や社会文化体系に関する知識を常に拡げている。そして、それらの評価や知識に基づき、各生産工程に専門化している企業と協調して製品計画を策定し、企業間関係の調整を行なって各工程を委託する。このように「真正企業家」は、「産業地区」を「弾力的資本」として利用し、世界市場に適合する製品を多種にわたり生産させていると見る。<sup>(20)</sup>

(4) 生産工程を直接担う企業は常時、その競争的地位を改善するための活動を繰り返すものと見てるように思われる。その際、中古機械の市場がその競争的活動を支援していることが示唆されている。通例、小企業は資本市場へのアクセスが困難なので、<sup>(21)</sup>新規の設備投資に対して消極的になるかもしれない。そこで、互いに不要になった機械を市場を媒介として融通し合えば、それぞれが状況に応じて最適な機械を比較的低コストで獲得することが可能になる。つまり、互いに協調して地区内の「資本流動性」を高めることで、諸状況に見合った最適な設備に投資しようとする企業家精神が醸成され、それに伴って競争も促進されてゆくと思われる。

また競争してゆく場合、地区のメンバーが協調して遵守すべきルールが存在するが、その主なものとして地区の価格システムが示されている。地

(19) この訳語は決して十分に適切なものとは言い難い。これについて、読者の教を請う。

(20) Becattini, G., (1990a): p. 42f; Becattini, G., (1991): S. 39f; 周知のように、一例としてはプラトー州の「インパナトーレ」(impannatori)が挙げられる。

(21) ただ、企業家や地域生活と結びついた地方銀行による支援は存在すると述べている(Becattini, G., 1990a: p. 47.)。

区内の財やサービスの価格は、確かに国際市場や国内市場には左右されるが、地域的習慣に従う地域制度に基づき、協議によって決定がなされる。このシステムによって外部の市場価格に比して変動が抑制され、諸コストを相対的に安定化させることができるという。以上のように「産業地区」では、社会文化的要素が関わって、競争と協調の結合が図られているとする。<sup>(22)</sup>

さらに「産業地区」の各企業は絶えず、ある一定の工程における、企業内で遂行するコストと企業外で遂行させるコストを比較しているという。これは一般的な「内製か購買か」の問題ではなく、「遂行するか、遂行させるか」の問題となっている。通例、市場取引で低コストを理由に外部へ生産を委託すれば、その工程への統制力は弱まる。しかし、同一の歴史的文化的要素を共有する地区の企業間では、地域の社会的規制により企業境界を越えても、工程間の有機的結合が容易であると示唆されている。これが住民の中に広範に存在する自己経営の設立希望と合わさって垂直的統合化を抑制するので、中小企業群はネットワーク化し、「真正企業家」を媒介として世界市場に供給しゆく地域独自の多様な製品を生み出して、「産業地区」のダイナミズムを維持しゆくと考えられている。<sup>(23)</sup>

(5) ただ、ここで強調しておかなければならないのは、このような「産業地区」の企業システムと家族システム、もしくは生産活動と日常活動の融合の媒介になっているものとして、不正なパートタイム労働やアルバイト労働等の存在が重要視されていることであろう。なぜなら、これらの労働力は景気変動の際、地区への衝撃を吸収して「産業地区」特性の基盤を保護し、彼らを利用することで（経済的負担を軽減して）企業家の輩出を継続的に促進しゆく役割があるためだと述べられている。<sup>(24)</sup>

(22) Becattini, G., (1990a): p. 45f.; Becattini, G., (1991): S. 41; Cf., Becattini, G., (1990b): p. 166.

(23) Becattini, G., (1990a): p. 48; Cf., Becattini, G., (1991): S. 39f.; もちろん、これらの理由だけが垂直的統合化・規模拡大していかない要因とされているわけではない。

(24) Becattini, G., (1990a): p. 43; Becattini, G., (1991): S. 40; 不正労働の存在に対（次頁につづく）

また景気変動だけではなく、技術上の変化といった環境変化への「産業地区」の対応はどう見ているのであろうか。基本的に地区は、技術進歩の受容に対して抵抗する。なぜなら、新たな技術の導入は、大企業におけるような少数者による意思決定の問題ではなく、経験で形成されてきた「人的資本」の有効性を減じてしまう、地区の社会構造上の事柄だからである。しかしながら地区のメンバー等は、技術的に“最新”であろうとする価値観から、“痛み”を伴いながら自分たちの「資本」を再編成してゆくとされる。<sup>(25)</sup>

(6) 「産業地区」における諸構造の、資本主義的形態との関係についても言及している。「産業地区」の生産組織や社会構造を固定的なものとなさず、それらは常時、「フォード主義的」生産システムと現れる)資本主義的形態の強化と弱化との間を変動していると考える。それが強化される場合は、地区のメンバーの社会的意識が「階級意識」を、また弱化される場合には「地域意識」を深める方向へと作用する。但し、その構造的変動の範囲の一方の極は、一つもしくは少数の企業による完全な垂直的統合化であり、それに企業家が吸収されて家族労働が消滅し、生産外部化が行われなくなる。そして(労働の)二極分解や諸階級間の分離が生じてくる。他方の極では生産が分散化され、工場での生産や賃労働が完全に消滅して、「真正企業家」による調整のもとで個人や家族単位の生産が行われるという。<sup>(26)</sup>現在注目を浴びている「産業地区」は、それら両極の中間形態と見なされている。ともあれ、このような社会的諸関係が「核」として機能している「産業地区」では、資本主義的な特徴をその諸関係の中に「埋めて」

して、それを「第三のイタリア」の「暗部」と見る向きもある(Murry, F., 1987: pp. 87-92.)。しかしベカッティーニは、彼らの労働条件だけでなく生活水準も見べきだとして、その他の先進諸国との同一性を主張する。さらに不正労働は、彼らにとっては富裕(貯蓄率の高い)家庭の特別収入でもあると考えている(Becattini, G., 1990b: p. 168f.)。

(25) Becattini, G., (1990a): p. 46f; Becattini, G., (1991): S. 41f.

(26) この両極の社会経済構造を、前者は「ゲゼルシャフト」、後者は「市場ゲマインシャフト」に相当するとしている(Becattini, G., 1991: S. 41.)。



いるが、そのためにかえって多方向からの影響を受けやすいとされる。<sup>(27)</sup>

(7) 要するに、「産業地区」全体としては大規模な生産体であるが、その中での各局面効率化への調整と統制は、大企業のような「管理的統制」やヒエラルヒーではなく、違反を罰する「社会的認可システム」(ein System sozialer Sanktionen)と結びついた、競争を促進させる「自動調整機構」によってなされる。そして、地理的な近接性を背景とした企業間の競争と協調により、弾力性を失わずに大量生産の利点を実現するとしている。ただ、それは、大企業と同等の能力を保持することを意味するものではなく、他の大企業と競争できる能力を身に付けたものと見る。<sup>(28)</sup>

(8) さらに、これらの特性を持つとされる「産業地区」の将来は、ベカッティーニに、次のように展望されている。それは、直接的には納入業者の動向に依存すると見るも、根本的には、「産業地区」の経済的社会的文化的諸条件の再生産に依るとしている。なぜなら「産業地区」において、地区内諸関係と、地区と外部世界との諸関係に見られる特性が、社会文化的要素と経済的要素との容易ならざる結合に起因すると考えているからに他ならない。この結びつきは時とともに変化して弱体化をたどると予測し、近年の不確実性の大きい環境変化の中では、一層その傾向が顕著になってきたと証拠を挙げている。

それは以下の一連の事柄である。「産業地区」では企業の出生率よりも死亡率が上回るようになり、失業率が明らかに増大している。短期的変動には、不正労働の量的伸縮で対応できるが、最近のより大きな変動に対しては、それによる対処では不十分となって失業が増え、それによって地区外へ移住する者が増加してきた。そして、地区で蓄積されていた「資本」が消滅しつつあることが述べられている。ともかく、「産業地区」特有の地域機構と技術的特性、価値体系の間の結合は変化しうるもので、決して

<sup>(27)</sup> Becattini, G., (1990a): p. 49; Becattini, G., (1991): S. 40f.

<sup>(28)</sup> Becattini, G., (1990a): p. 46; Becattini, G., (1991): S. 42; Cf., Becattini, G., (1990b): p. 166.

永続化せず、工業発展の「一区間」のものに過ぎないとしている。<sup>(29)</sup>

### Ⅲ. ベカッティーニ説とセーブル／ピオーリ説との比較・検討

以上、「第三のイタリア」における「産業地区」特性の、ベカッティーニによる把握の内容を概観してきた。ただ、この議論が妥当性を持つかどうかについては様々な見解もあるが、それに直接関わることはこの小稿の第一義的な目的ではない。ここではさしあたり、このベカッティーニ説を、「第三のイタリア」を次代の生産体制（「弾力的専門化」）と見なそうとするセーブル／ピオーリ説と比較することにより、<sup>(30)</sup>「第三のイタリア」における「産業地区」の特性把握にあたって、今後留意すべき若干の課題について考えてみることにしよう。

(1) まず両説での特性把握において、ともに「産業地区」は「共同体と企業が融合」したものであり、<sup>(31)</sup>弾力的な生産が行われると見られている。<sup>(32)</sup>また地区が一定の規模を持つ外国市場と結合しているとする認識も共通のものと考えられよう。<sup>(33)</sup>

(2) 一方、両者で特性把握が大きく異なってくるのは、第一に「フォード主義的」生産様式との関連ではないだろうか。ベカッティーニはこれを「産業地区」特性の一要素になりうる可能性を示しているが、<sup>(34)</sup>セーブル／ピ

(29) Becattini, G., (1990a): p. 49f.; Becattini, G., (1991): S. 41, 48f.; Cf., Becattini, G., (1990b): p. 163.

(30) ここでのセーブル／ピオーリ説は、主に Sable, C. F./Piore, M. J. (1984) を指すものとする。但し、セーブル／ピオーリ説に対する批判論文の紹介に関しては、拙稿（1991）、187頁を参照。また「第三のイタリア」は「弾力的専門化」モデルに当たらないとする批判（Amin, A. & Robins K. 1990: pp. 196-199.）に答えて、ピオーリは「第三のイタリア」は「弾力的専門化」のモデルというよりも、その可能性を持った形態と見るべきだとしている（Sabel, C. F., Piore, M. J. & Storper, M., 1990: p. 225.）。

(31) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984): p. 275.（邦訳、351頁）、註(11)を参照。

(32) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), pp. 17, 213-216.（邦訳、22-23, 278-282頁）、註(13)を参照。

(33) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), pp. 227-229（邦訳、293-296頁）、註(18), (19), (20)を参照。

(34) 註(27)を参照。

オーリはそれを「大量生産」として、対概念たる「弾力的専門化」の可能性を秘めた「産業地区」には全く異質のものと見なしている様に思われる。<sup>(35)</sup> 前者の認識では、「フォード主義的」要素は、直接的には完全な「垂直的統合化」によって「産業地区」に顕現する（またその逆の）可能性が強調されている。後者では「産業地区」が、弾力的な技術を利用する限り、地区内需要もしくは奢侈品のみを充足する性格のものとなるか、先進国で現在拡大しつつある多様で細分化された市場に適合するものになるかのどちらかが想定されており、いずれにしても「フォード主義的」要素とは基本的に“無縁”なものと見られている。<sup>(36)</sup>

このように両者で認識が分かれるのは、次の理由によるものと思われる。<sup>(37)</sup> ベカッティーニはまず地区での生産様式と社会構造特性の組合せに注目し、それが内的外的諸変動によって（「垂直的統合化」が「階級意識」を生起させ、不正労働の収縮が地区の「資本」消滅を促進するという具合に）将来、変わりうると展望する。一方のセーブル／ピオーリは、一定の生産様式（「クラフト生産様式」）と社会構造特性の組合せの確立・存続を基本的前提とした上で、それらと結合した生産技術の、需要条件との適合関係を中心に議論しているからではないか。

(3) ベカッティーニによれば、地区の良好な機能を支える「資本」は経験から形成されるため、「技術進歩」の到来に対して抵抗を示すとされるが、地区の価値観から、やがて人々はそれを受容すると述べられている。<sup>(38)</sup> セーブル／ピオーリ説では、地区の社会構造特性と結びつく「新技術」機能の、現在将来の市場状況下での経営上の有効性を主張しようとしている。<sup>(39)</sup>

(35) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), pp. 5-6, 213-216 (邦訳, 6-8, 22-23頁)

(36) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), p. 278f. (邦訳, 355頁) ; Cf., *ibid.*, pp. 189-191 (邦訳, 249-252頁, 参照) ; セーブル／ピオーリも「産業地区」の社会構造特性が「フォード主義的」になる可能性も示唆していないことはないが (*Ibid.*, p. 263: 邦訳, 336-337頁), 地区特性の基本的な把握においては、その特性をほとんど存在しないものと見なしていると思われる。

(37) Cf., Becattini, G., (1990b): pp. 163-165.

(38) 註(25)を参照。

(39) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), pp. 258-267. (邦訳, 331-341頁)

新たな技術の導入・利用に対して、前者では、社会構造特性は一方で既存技術の利用形態を支え、他方では最新技術保持の動機を強めているために、抑制作用と促進作用の二面的特性を持ったものと捉えられている。だが後者は、需要条件との関連で、それが新技術導入促進の方向へ、さらには新技術の潜在能力の最大限発揮の方向へ作用することを強調している。

(4) 「産業地区」の持つ「弾力性」の起源に対する把握も両者間で違いを見せている。ベカッティーニ説では、主に地区の社会文化的体系から維持されている生産の分散化が、製品多様性と製品変化の迅速性を実現させる源と見られており、<sup>(40)</sup>同時に景気変動への不正労働力の構成変化による生産量増減での対応も含意されているようにも見える。セーブル／ピオーリ説では、上の「弾力性」は基本的に新技術の機能により実現されるものとされている。さらに、その新技術によって労働内容や労働編成、企業間関係は弾力的になり、しかもこれらが「技術革新」を生む源泉と見られている。<sup>(41)</sup>

つまり、製品の(量的)質的变化という外的生産機能の「弾力性」の起源に関して、前者はここでも基本的に社会構造特性と生産様式の組合せから捉えようとしているのに対して、後者は根本的に、新技術の特性が「弾力性」、さらには「技術革新」までも生み出しゆくと見ている。

(5) 諸コストの考慮も両者間で若干の異なりがある。ベカッティーニは地域機構による中間財コスト変動の抑制を認めるだけでなく、さらに「産業地区」が、資本・原料・労働市場の独特の性質から、規模の経済等によるコスト低減効果を持つことにも言及している。<sup>(42)</sup>セーブル／ピオーリの方は、地域機構により賃金や商品・サービスといった諸コストの安定化が図られるとするが、それは企業内企業間の関係安定化を目的としたものであることを示唆している。<sup>(43)</sup>

(40) 註(12), (13), (23)を参照。

(41) 註(95)を参照。

(42) 註(21), (22), (24)を参照。

(43) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), p. 272f. (邦訳, 347-348頁)

前者によれば、諸コストの安定化・低減化は、主に良好な経済的パフォーマンスを保証するものとして見られ、後者にとって地域機構によるコスト安定化は、直接的には地区の社会的安定化の保証に寄与すると見られているのではなかろうか。<sup>(44)</sup>

(6) 不正労働の評価にも隔たりがあり、「産業地区」の存立を支援する要因と見るか、脅かす要因と見るかで分かれている。ベカッティーニは不正労働を地区の不可欠な存立条件として見るが<sup>(45)</sup>、セーブル／ピオーリは労働者の搾取を防ぎ、地区特性の維持を図るために、地方政府によって不正労働が取り締まられる重要性に言及している<sup>(46)</sup>。

#### IV. 小 結

以上、ベカッティーニ説のセーブル／ピオーリ説との比較検討から、「第三のイタリア」における「産業地区」特性の把握に際しては、少なくとも次のような事項に留意すべきではないかと思われる。

1. ベカッティーニは「産業地区」の特性把握において、特定の生産組織と特定の社会構造の両者を一体不可分なものとして捉えていたと考えられる。その視角からすると、いずれかの組織・構造の基本的性格が変化すれば、その統一は崩壊してゆくという展望を持つに至る。しかし、この両者を一体化したものと見るができるとはいえ、やはり「生産（技術）」と「社会」にはそれぞれ独自の論理が存在する。そこで、基礎的には別々の論理を持った両者を一体化させている条件をより明確にすることで、「産業地区」自体の特性を見定めることができるのではないか。この議論が

(44) この点に関して、セーブル／ピオーリの議論は、営利性の確保を所与とした「社会学」に過ぎないものであることを示唆する者もいる (Korver, T., 1988: p. 50f.)。

(45) 註(24)を参照。

(46) Sable, C. F./Piore, M. J. (1984), p. 229. (邦訳, 296頁) ; この点に関しても批判がある。セーブル／ピオーリは政府の取り締まりによって、不正労働の消滅が実現されると予期しているが、現実には不正労働はなくなっていないと述べる者もいる (Murry, F., 1987: pp. 88-90.)。またわが国で、イタリアの不正労働の実態を概観にしたものに、長手喜典 (1991), 49-56頁がある。

不十分だと、「大きな変化」によって「いつか」崩れる、というような漠然とした予測（またはその徴候を指摘すること）しかできないのではなからうか。

一方のセーブル／ピオーリは、新技術の潜在的可能性を、需要条件に適合するよう引き出す条件として、ある社会構造の作用の重要性を指摘する。ただ、そこには、地区の社会構造の側面だけを強調しているか、もしくはそのような社会構造特性の存続・維持を所与とする操作が行われているようにも思われる。だとすれば、生産システムと需要条件の適合性のみに焦点を当てることができ、いかなる環境（需要）の変化に対しても、「有利」な社会構造特性は不変のまま、適応可能な展望に導かれてしまう。

2. 「産業地区」の特性把握を困難にしているのは、技術的要因や（経営）経済的要因と同じくらい、もしくはそれ以上に社会（学）的要因に対する考慮の比重が高くなっていることによるものと思われる。言い換えれば、複雑に絡んだ三次元の要因の結びつき方を解明するアプローチの違いが、「産業地区」や「第三のイタリア」の評価を混乱させている大きな原因ではないだろうか。例えば、ある次元の要因が他次元の要因を一方的に規定しているとする見解や、ある次元の諸要因を所与とする見方、また二つの次元間にまたがる諸要因の組合せを固定的なものとする視角は、全て一面的な特性把握につながるであろう。

故に、重要視されている社会（学）的要因が他次元の諸要因といかに結びつくか、換言すれば、地区の技術システムや経済システムと社会（文化）システムが相互にどのように関連し合っているかを明らかにすることが必要となる。<sup>(47)</sup>それは次のような方向性を持つアプローチで考えられないだろうか。<sup>(48)</sup>つまりそれは、競争力を直接規定している地区の技術システムが、

(47) 後年、ピオーリは「産業地区」における技術的側面・経済的側面・社会的側面の、それぞれの間（例えば生産活動と社会行動間）に存在する「パラドックス」を指摘した(Piore, M. J., 1990: pp. 65ff.). 彼もまたそれらの間の関係を明らかにする必要性を認識しているように思われる。

(48) 宗像正幸（1993）の特に43-44頁を参照。

社会システムとどのような経済的合理性の下で結び合わされているのか、もしくは、経済システムと技術システムとの結合がいかなる社会（学）的要因によって、どのように抑制・促進されているかというものである。

また、このようなアプローチは、「信頼」等の社会学的要素が関与している可能性があると言われる「ネットワーク」の分析に対しても、有効ではないかと思われる。

3. 上のようなアプローチの様式による「産業地区」全体の特性把握の前に、地区の各局面での特徴を掴まえておくことが不可欠ではなからうか。例えば、社会構造特性上の「技術進歩」の受容・利用に対する抑制要因と促進要因、及びそれらの要因が顕現する場合の諸条件の明確化が必要でなろう。さらには、地区の生産活動における営利性確保の基本的メカニズムも、資本・原料・労働・製品の各市場の特性や生産技術特性、及びそれぞれの関連性を、コストと収益の観点から考慮しつつ、明らかにしてゆかねばならないと思われる。特に不正労働の役割把握は、見解が分かれるだけに、より慎重な実態の認識が必要かもしれない。

4. また、地区の弾力的生産は、それが実現されるための諸条件とその場合の「量的・質的」範囲、特に製品上プロセス上の何らかの技術革新を伴う時は、その革新の次元と革新生起のための諸条件に留意しなければならないのではないか。その際、言うまでもなく、精緻な新技術の特性評価、なかんずくその「弾力性」評価が必要となる。<sup>(49)</sup><sup>(50)</sup>

5. 地区では生産単位や所有（資本負担）単位が分散化していることにも注意を払わなければならないであろう。いわゆる「大企業」とは、経営生産上の技術的合理性や経済的合理性の範囲や次元が異なるかもしれないからである。

(49) この場合、革新の次元を把握するメルクマールに関しては、宗像正幸（1989）、250-283頁を参照。

(50) 新技術の経営生産の「弾力性」評価に関しては、宗像正幸（1989）、322-349頁を参照。

## 引用文献

- Amin, A. & Robins K. (1990) "Industrial districts and regional development: Limits and possibilities", in: Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), *Industrial districts and inter-firm co-operation in Italy*, Geneva, 1990.
- Becattini, G., (1990a), "The Marshallian industrial district as a socio-economic notion", in: Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), *Industrial districts and inter-firm co-operation in Italy*, Geneva, 1990.
- Becattini, G., (1990b), "Italy", in Sengenberger, W., Loveman, G. W. & Piore, M. J. (eds.), *The re-emergence of small enterprises: industrial restructuring in industrialised countries*, Geneva, 1990.
- Becattini, G., (1991), „Industrielle Distrikte' und ihre Bedeutung für die sozio-ökonomische Entwicklung Italiens“, in: Manz, T. (Hg.), *Klein- und Mittelbetriebe im Prozeß der industriellen Modernisierung*, Bonn, 1991.
- Bellandi, M., (1989), "The industrial district in Marshall", in: Goodman, E./Bamford, J. (eds.), *Small Firms and Industrial Districts in Italy*, London/NY, 1989.
- Goodman, E./Bamford, J. (eds.), (1989), *Small Firms and Industrial Districts in Italy*, London/NY.
- 石倉三郎 (1992) 「産地産業の発展と第三のイタリア」, 『産業研究所紀要』, no. 1.
- イタリア地域経済研究会編 (1989) 『イタリアの挑戦』, 大阪自治体問題研究所。
- 岩橋良之 (1994) 「イタリア地場産業の競争優位性」, 『商工金融』, 1994年10月号。
- Kiyonari, T., (1992), "Japanese and Italian Small Businesses Compared", *Keiei-Shirin*, vol.28 no. 4.
- Korver, T., (1988), "Revival of craftsmanship? On technology, labour, and political economics, in: Buitelaar, W. (ed.), *Technology and Work: Debates from England, Germany and Holland*, London, 1988.
- 児山俊行 (1991) 「『弾力的専門化』概念に関する一考察」, 『六甲台論集』第38巻第3号。
- Manz, T., (1991), „Industrielle Modernisierung und die ‚Renaissance‘ der Klein- und Mittelbetriebe – zur Einleitung“, in: Manz, T. (Hg.), *Klein- und Mittelbetriebe im Prozeß der industriellen Modernisierung*, Bonn, 1991.
- Marshall, A., (1890), *Principles of economics*, London, 1989, Düsseldorf, (馬場啓之助訳, 『経済学原理 (2)』, 東洋経済新報社, 1966年)
- 宗像正幸 (1989) 『技術の理論』, 同文館
- 宗像正幸 (1993) 「生産システム特性把握の視点について」, 『国民経済雑誌』, 第



167巻 第3号, 平成5年3月。

Murry, F., (1987), "Flexible specialisation in the Third Italy", *Capital and Class*, no. 33.

長手喜典 (1991) 『イタリア経済の再発見』, 東洋書店。

ニュービジネス協議会編 (1993), 『不況に勝つ経営: 現状打破のネットワーク戦略』, 東洋経済新報社。

岡本義行 (1994) 『イタリアの中小企業戦略』, 三田出版会。

Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), (1990), *Industrial districts and inter-firm co-operation in Italy*, Geneva.

Piore, M. J., (1990), "Work, labour and action: Work experience in a system of flexible production", in: Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), *Industrial districts and inter-firm co-operation in Italy*, Geneva, 1990.

Sable, C. F., (1982), *Work and Politics*, Cambridge/London.

Sable, C. F./Brusco, S., (1981), "Artisan Production and Economic Growth", in: Wilkinson, F. ed., *The Dynamics of Labour Market Segmentation*, London/NY, 1981.

Sable, C. F./Piore, M. J., (1983), "Italian Small Business Development: Lessons for U. S. Industrial Policy", in: Zysman, J./Tyson, L., *American Industry in International Competition: Government Policies and Corporate Strategies*, Ithaca/London, 1983.

Sable, C. F./ Piore, M. J., (1984), *Second Industrial Divide*, NY. (山之内靖・永賀浩一・石田あつみ訳, 『第二の産業分水嶺』, 筑摩書房, 1993年)

Sabel, C. F., Piore, M. J. & Storper, M., (1990), "Three responses to Ash Amin and Kevin Robins": in Pike, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. (eds.), *Industrial districts and inter-firm co-operation in Italy*, Geneva, 1990.

Sforzi, F., (1989), "The geography of industrial districts in Italy", in: Goodman, E./Bamford, J. (eds.), *Small Firms and Industrial Districts in Italy*, London/NY, 1989.

Sydow, J., (1992), *Strategische Netzwerke: Evolution und Organisation*, Wiesbaden.